

明治期動物愛護運動の動機づけはいかなるものであったか

——関係者の背景分析を通して——

伊勢田 哲治

日本において欧米型の動物愛護運動が最初に導入されたのは動物虐待防止会が結成された明治三〇年代のことであったとされる。この時期の動物愛護運動については、資料が少ないこともあってこれまであまり研究がされてこなかった。しかし、欧米型動物愛護運動と出会ったときに日本人がどのように反応したかを知ることが、日本人の動物観を知る上で、また日本と欧米の間の動物への態度の差を理解する上で、重要な示唆を与えるのではないかと考えられる。本稿では、動物愛護運動にどのような要因が働いていたかを考えることでこうした理解に資することを目的とする。

動物愛護運動にどのような要因が働いていたか、というおおざっぱな問いは、いくつもの異なる意味に解釈しうる。たとえば、「動物愛護運動の開始の原因となったものは何か」という開始に関する問い、それから「動物愛護運動の持続を支えていたのは何か」という持続に関する問い、そして「動物愛護運動が大きな運動となりえた要因は何か」という広がりに関する問いなどが考えられる。本稿でもおもに想定するのは最初の二つ、開始と持続である。

本稿では、初期の動物虐待防止会の動きを、それを呼びかけた人や支えた人々の背景を分析して、明治期の動物愛護運動の性格について明らかにする。「誰が始めたのか」「誰がやっていたのか」を知ることが、どういう要因が運動を支えていたのかを知る手がかりともなるはずである。「要因」というと、文化や社会状況といったマクロな社会的要因を想定するであろうが、そうしたものにして、具体的な個人の行動という形を通さなくては動物愛護運動に影響しえないはずである。人的な分析は、決してミクロな分析に留まるものではなく、マクロな社会現象としての動物愛護運動の理解にも欠かせないステップとなるはずである。本稿ではこの手法を用いて、動物愛護運動を中核となつて担ったグループがいくつか存在していたことを明らかにしていく。

一 先行研究

動物虐待防止会（以下防止会と略）が成立したのは明治三五年

(一九〇二年)のことである。中心となったのは広井辰太郎であったが、当時の著名人が多く発起人に名をつらねた(この経緯についてはあとでくわしく見る)。実は、この団体の成立を論じた研究文献は管見した限りでは非常に少なく、成立の事情についての説明もそれぞれに微妙に異なっている。以下、四つの研究を時代順に見ていこう。

吉田(一九六四)は仏教清徒同志会などの明治時代後期の仏教系社会運動を論じる一環として、「欧米の動物愛護思想の影響をうけて仏教教理が反省された」(五七〇ページ)という文脈で動物虐待防止運動をとりあげている。防止会の設立そのものについては、広井が中心となりながらも、同志会のメンバーが積極的にかかわっていったという記述を行っている。キリスト教系の運動と仏教系の運動の接点として防止会設立をとらえていると見ることができらるう。

尾崎ほか(一九八二)は、冒頭の要約において、「一人の青年牧師の牛馬虐待に対する熱い義憤が、近代日本の動物愛護運動史の幕明けへとつながった。」と述べ、広井の訴えに人々の心が動かされ、「朝野の名士74人」が発起人として集まった、というイメージを描いている(一〇一―一〇二ページ)。その後の運動の展開においてはともかく、出発点においては広井という個人の熱意が団体結成の動力になった、という、ある意味で英雄史観的なイメージを描いているといつてよいだろう。

今川(一九九六)が描くのは、マクロな視点からの流れである。

「日本人の中でも欧米に留学、滞在した経験を持つ知識人や宗教家らを中心とした層に動物愛護という近代市民の道徳観が広がり、組織的な活動へと発展していった」(二三〇ページ)というのが今川の大局的な分析である。もう少し具体的なレベルでは、「あふれ来る西欧文化にふれて、日本人としてのアイデンティティと宗教観を改めて問い直し、近代市民の持つべき道徳観を構築しはじめた時期の中の、動物愛護論だった」(一三一ページ)と今川は分析する。

動物愛護に関する訓令が防止会が設立される前に発せられており、防止会設立は「警察が牛馬虐待取り締まりに乗り出した好機をとらえて」(二三三ページ)なされたものだと今川は解している。また、発起人については、確かに職業、宗教、思想的傾向などでは雑多だが、「いずれも学歴が高く有識者で、政治、学究、宗教などの世界では第一線で活躍をしていた、という点では共通の基盤に立っていた」(二三七ページ)という点を指摘する。また、会そのものも、運動団体というよりは「思想善導団体」(一三八ページ)の性質が強かったことを指摘する。広井については尾崎ほか(一九八二)のプロフィールを転載して、キリスト教の影響を受けていたことを指摘するのみである。以上のように、今川のえがくイメージは、尾崎ほかと対極に、防止会は知識人が中心となって行った教化運動であり、日本の近代化という文脈でとらえるべきものだという考え方がある。

近森(二〇〇〇)は、それまで散発的に動物虐待に対する指摘が行われてきていたのに対し、防止会の成立以後は組織的な社会運

動として動物愛護が取り組まれるようになったことを指摘し、なぜこの時期だったのかと問いかける。近森が着目するのは、明治三〇年代というのが、足尾銅山鉍毒事件をはじめ、さまざまな社会問題が同時に問題化した時期であったということである。ここで近森は、イギリスのビクトリア朝での動物愛護運動を分析したターナー(二九九四)の議論を取り入れ、「他者の苦痛への配慮」という「まなざし」がこの時期に制度化されたのだと考える。つまり、「他者の苦痛への配慮をするものだ」という了解が成立した一環として防止会も作られたのだ、というのである。しかし、そうしたまなざしが本当に下層階級に向いてしまうと搾取の上に成り立って生活している「上・中流階級」にとっては不都合なことになる。そこで、上・中流階級が、他者の苦痛へ配慮を示しつつ、しかも自らのまなざしによって自らを否定せずにする、という矛盾した要請を満たすように登場したのが「動物への配慮」という問題だったのだというわけである。

このように、四つの研究はそれぞれ防止会の成立をうながした要因として、それぞれ別のものを持ち出している。要因の部分だけをまとめるなら、吉田はキリスト教系と仏教系の運動、尾崎ほかは広井個人の熱意、今井は近代化およびその中の知識人による啓蒙、近森は他者への苦痛への配慮というまなざしの成立と上流階級の階級利害、といったものをあげている。本稿の目的は、以上のような分析のどれが正しいかを決めようというものではない。どれも真理の一面を捉えているであろうし、何より、当然のことだがこれらは

お互いを排除するものではない。たとえば広井がキリスト者であったことはすべての研究で言及されており、これが広井を動物愛護に駆り立てた(そして動物虐待防止会の成立に至った)一つの要因であったことはだれも否定していない¹⁾。彼らの指摘をひとつの流れとしてまとめることすらできる。他者の苦痛への配慮というまなざしの成立を背景として、広井辰太郎という個人が動物虐待防止をうったえ、それに応じたキリスト者、仏教者が中心となって運動が生じた、そしてそれは知識人による啓蒙活動という形をとった、というようにである。

しかし、ではこれらの要因がそれぞれどれくらい強いものだったのか、実際のところお互いにどのように関係していたのか(上でまとめたようなシナリオに統合してよいのか)、ということについては、先行研究は触れていない。これは、先行研究がお互いにかなり独立していることから、ある意味で当然でもある。さらに、ここで挙げられていないような要因が実は重要な役割を果たしていたのではないかという可能性もある。本稿に与えられたスペースでこの問題を十分に取り扱うことはできないが、この問題にとりかかる手がかりを得るため、防止会の成立と運営に関わった人々がどういう人々だったかを見ていくのが本稿の任務となる。

二 動物虐待防止会の成立の経緯

まず、防止会がどのようにして成立したのか、という経緯を、防

止会自体の出版物を中心にまとめよう。

『動物虐待防止会一覽』（以下、『一覽』と略）によれば、会のおこりは以下のような経緯をたどった。^②少し長くなるが、数少ない同時代資料であり、以下の分析にも深く関わるので、関連箇所をそのまま引用しよう（以下、引用においてはすべて旧字体は新字体に、仮名遣いは現代風にあらためてある）。

「併しながら、近頃此の事「動物をあわれみいたわること」を世に訴えて本会のおこるもといをなしたのは明治三十二年十二月発行の『中央公論』に掲げられた広井辰太郎氏の動物保護論であります。大内青巒氏は此の論を読んで深く同情を寄せ、『中央公論』の主筆桜井義肇氏の紹介を以て広井氏と会見いただきました。これが本会の成り立つそもその始であります。その後広井、大内、桜井の三氏は度々寄り合つて相談いたされましたが、一つの会を組み立てるまでの運びには至らずに四年を過ぎました。かくて明治三十五年一月島地黙雷、高楠順次郎、前田慧雲、梅原融の諸氏が日本橋俱樂部に寄り合うことがありまして大内、桜井の二氏も此の席に臨まれました。そこで二氏が相談して広井氏と巖本善治氏とをその席に誘引せられ、大内氏が主として本会設立のことを会合の諸氏に相談いただきました。列席の諸氏はいずれも異議なく賛成いただきました。さらに日を定めて相談することとなりました。これが即ち一旦目を出しかけて久しく育ちかねて居た本会が再び芽を出すに至つた次第であります。」（動物虐待防止会一九〇三、一一二ページ）

この経緯についてはいくつか補足する必要がある。発端となつたのは広井辰太郎が明治三二年（一八九九年）に雑誌『太陽』と『中央

公論』に載せた動物愛護に関する論説であつた（広井一八九九 a、一八九九 b、一八九九 c）。『一覽』ではなぜ広井と大内が知り合つてすぐに運動に動き出さなかつたのかは説明されていないが、広井自身の回想では、彼は大内と知り合つてすぐに牧師をやめて福井中学に職を得、東京をはなれたとのことである（広井一九四一）。明治三四年の一月に帰京すると、広井は住所も定まらないうちに大内青巒にコンタクトをとり会の創設についてもちかけたようである（広井一九四〇 a）。その後の経緯については上に引用した部分も含め、『一覽』の記述と広井の回想はおおむね一致している。^③

その後、設立準備会が重ねられ、仏教界、キリスト教界、教育界、出版界などの著名人に対する賛同の呼びかけが行われ、『中央公論』三五年五月号で公開された趣意書には発起人五六人が名を連ねた。^④こうして、日本初の西洋型の動物愛護団体である動物虐待防止会はその年のうちに発足した。六月一日には当時インドから来日していた仏教活動家ダルマバーラを招いて大きな講演会を開き、一月二五日には正式な発足のための総会と講演会を開催するなどして、かなりの注目をあつめたようである。^⑤

明治三六年には毎月一五日に月例会を開くという形式での活動が行われるようになった（この月例会は少なくとも昭和九年ごろまで行われていたことが各種新聞に掲載された会合予告から分かる）。また、関連団体も多く作られた。明治三六年には動物虐待防止会婦人が結成され、明治三九年には少年動物愛護会が結成される。^⑥各地の支部的な組織も作られ、明治三六年に千葉支部が、明治三九年

に横浜動物虐待防止会（これは支部というよりかなり独立性の高い組織だったようである）が作られている。その他、結成時期は不明だが神戸でも動物虐待防止会が作られている⁷⁾。会員数は明治三六年五月の段階で八一五人、明治三七年二月の段階で「千幾百人」との記述がある⁸⁾。

その後、動物虐待防止会は明治四十一年に動物愛護会と改称し、大正時代、昭和時代と長期にわたって活動を続けた。大正時代には富士山から日比谷公園へ伝書鳩を飛ばすというイベントを主催したり、上野動物園の象が鎖で足をつながれていることに抗議するキャンペーンを「アサヒグラフ」や日本人道会（大正時代に結成されたもう一つの動物愛護団体）とともに行ったりと、社会的な注目をあつめる行動を行った。昭和期に入り戦中になっても機関誌『動物愛護』を発行するなど細々と活動を続けていたが、戦後になって動物愛護協会が成立したことで役割を終えた。こうした後年の動物愛護会のあり方も日本の動物愛護運動史を理解する上で重要であるが、本稿では発足当初（『一覽』や『あはれみ』でカバーされているおおよそ明治三八年ごろまで）に焦点をさぼる。

三 動物虐待防止会の呼びかけ人の分析

動物虐待防止会の運動を実際に担っていたのは誰だったのか、という視点から動物虐待防止会を動かしていた背後の要因を考えてみたい。吉田、今川、近森らの先行研究では、『中央公論』に発表さ

れた発起人のリストに注目して運動の中心となった層の分析を行っているが、発起人は「名前だけ貸す」ことも十分可能であり、主体的な運動の担い手とは必ずしも一致しないであろう。ところで、そもその出発点となった会合に出席していたのが大内青巒、桜井義肇、島地黙雷、高楠順次郎、前田慧雲、梅原融、広井辰太郎、巖本善治で、特に大内、桜井、広井の三人が積極的に動いたことはすでに触れた。最終的に七〇名以上にふくらむ「発起人」と區別して、彼らを「呼びかけ人」と呼ぶことにしよう。彼らが動かなければ動物虐待防止会は存在しなかつただろう（すくなくともこの時期には成立しなかつただろう）という意味で、彼らは防止会設立の直接の「原因」といつてもよい。ということは、発起人リスト全体を見渡すよりも、呼びかけ人たちが何者だったのかを詳しく見た方が、この時期の動物愛護運動の性格に迫れるのではないだろうか。そのような視点から、彼らのこの時期までの活動をもう少し詳しくみてみよう⁹⁾。

まず、呼びかけ人のうち広井と巖本をのぞく六人は仏教者である。大内は後で出てくる加藤咄堂とともに『明教新誌』などの雑誌を発刊して在家主義仏教を唱導し、仏教系政治団体の尊王奉仏大同団や聖徳太子を尊崇する上宮教会を創設するなどして、仏教の大衆化につとめた仏教運動家である。前田慧雲も尊王奉仏大同団に参加するなど、大内と行動を共にしていた。桜井義肇が『中央公論』の主筆であったことはすでに触れたが、そもそも『中央公論』の前身である『反省会雑誌』は真宗本願寺派の門徒の修養を目的として桜井、

梅原融、高橋順次郎らが創刊したものであった。なお、桜井は明治三七年に『中央公論』をやめさせられてからは自ら『新公論』をおこし、動物愛護関係の論説も以後『中央公論』ではなく『新公論』に掲載されるようになる。島地黙雷は僧侶ながら渡欧して海外の宗教事情を知り、政教分離をすすめたりした人物であり、高橋もまたオックスフォードなどに留学している。つまり、大内らは、単なる仏教者ではなく、かなりアクティブで先進的な仏教運動家の集団であったと言つてよいだろう。

キリスト者でこの会合に参加した巖本善治は、『女学雑誌』の主筆をつとめるなど婦人解放運動の先駆けとなった人物であり、この当時は『女学雑誌』に加えて明治女学校の校長をつとめていた。実は、防止会の設立より九年はやく、明治二三年から二四年にかけての『女学雑誌』において動物愛護キャンペーンが行われていた(二〇一頁一三ページ、二〇一頁一八ページ、二一九頁五三二―五三三ページ、二三〇頁一―二ページ、二六五頁三九八ページなど)。このキャンペーンでは無署名ないし特定できない名前による記事が多いが、最初の記事が社説であることから考えても、しかけたのは、当時の『女学雑誌』の主筆だった巖本だと思われる。¹⁰また、そうでなければなぜ『一覽』からの引用文にあるように彼が呼びかけ人の一人となるように特に呼び出されたか理由がよくわからない。

こうした顔ぶれの中で、広井辰太郎の経歴は比較的地味である。広井は当時まだ普及福音教会の牧師でキリスト教系の『六合雑誌』

等で文筆活動をしている程度の無名の人物であったが、これらの論説で大内青巒に知られるようになったのは『一覽』からの引用文にあるとおりである。彼は長崎の語学学校から新教の神学校へ進み、一旦牧師となったがやめて福井中学の教師となり、東京へもどつて明治三六年に東洋大学の講師となった。宗教的にも当初はプロテスタントを信仰していたが、のちには新教をはなれてユニテリアン協会に所属し、重要な地位をしめるようになる。ユニテリアン派は、三位一体や原罪を否定して他宗教に寛容であることを求めるなど、非常に特異な教義を持つキリスト教の分派であり、仏教に対しても肯定的な態度をとっていた。¹¹実はこのユニテリアン派の態度が動物愛護運動においても重要であったと考えられるが、それについては後述する。いずれにせよ、防止会結成当時の広井は定職のない若者(当時二七歳)にすぎず、他の呼びかけ人たちとの差は大きかったといえるだろう。¹²

以上のような人物像と『一覽』の記述からは、呼びかけ人グループについて以下のようなイメージが浮かんでくる。巖本にせよ広井にせよ、動物愛護を呼びかけはしても、自ら運動を組織する力はなかった。¹³そうした運動を組織する人脈と力を提供したのが、仏教系活動家グループであったのではないだろうか。

四 動物虐待防止会中心メンバーの分析

前節で見たのは、「動物虐待防止会の発足の「原因」となったの

表1 動物虐待防止会の例会出席回数

『動物虐待防止会一覧』および『あはれみ』で記録されている全16回（35年6月、および37年2月から38年6月まで、ただし37年8月と38年4月は会合なし）中の数字。アスタリスクがついているのは、出席回数中一回が35年6月の例会であることを意味する。

16回	櫻井義肇*、山縣悌三郎*
15回	高島圓*
14回	入江濤吉
13回	山縣五十雄*
12回	前田慧雲*
11回	加藤熊一郎*、杉村廣太郎、廣井辰太郎*、本田増次郎*、山縣文夫
10回	來馬琢道、櫻井彦一郎、吉田賢龍
9回	片山寛、斯波貞吉*、手島益雄、根本正、林吾一
8回	境野哲*、高島平三郎*、横尾賢宗
7回	梅原融*、岡本經朝、鼎義暁、島地黙雷*、山田瀨
6回	後醍院願誠（頼誠）、向軍治、湯本武比古*
5回	大内青巒*、荻野仲三郎*、小島剛四郎、瀧村立太郎、長澤則彦、松尾童阿彌
4回	黒岩周六*、篠田利秀（利英）*、副島八十六、塚原常之助、長野菊次郎、羽仁吉一、福岡秀猪、宮田脩（修）*、村上專精*
3回	白井水城、金澤久、後藤牧太*、澤柳政太郎、高杉瀧藏、高橋太華、竹下浩、竹島茂郎、星松三郎、本田存、吉村正寛
2回	安藤嶺丸、石井信二、井倉和欽、巖谷季雄、片山國嘉*、龜谷聖馨、神田佐一郎*、栗原定吉、隈本繁吉、佐藤惣三郎（佐藤總三郎）、下田次郎、千村正イ介、高橋虎一、津田次郎、原田長松、福島四郎、北條環翠、山本直良
1回	麻生正藏、安倍磯雄*、石田孫太郎、泉道雄、井ノ口丑二、岩本善治*、内村鑑三*、梅田謙敬、江原素六、大内俊、大久保高明、大沢弘毅、大下藤次郎、岡本正文、何礼之*、開田伊平、茅原廉太郎、河口慧海、河瀬秀治*、河瀬元九郎*、河野学一*、岸邊福雄、工藤慧達、黒田直道、堺利彦*、坂井義三郎、坂本武治、酒生慧眼*、潮谷孫七、島田蕃根、下中彌三郎、鈴木券太郎、鈴木勝太郎、瀨川光行、高橋順次郎*、田代元雄、田中松太郎、辻新次、堤寛、富田常次郎、豊田潔臣、中島半次郎、仁王頭辰二、布川、野口米次郎、橋本好藏、樋口勘次郎、藤岡勝二、北條見教、星野政吉、保坂幸三郎、前田徳水、松原茂、牧謙治、水野素、村上英雅、百島操、森卷吉、好本督*、脇田克博*、渡邊光風

はという人々だったのか」ということである。しかし、明治期の動物愛護運動を作った要因を考える上では、「その後の運動の継続の「原因」となったのはどういう人々だったのか」ということも考えてみる必要がある。はたして同じ呼びかけ人グループが運動をになつていたのであるだろうか。

この問題を考える上で参考になるのが、『一覧』や『あはれみ』に記録されている、例会の出席者名簿である。この二つの資料でつごう一六回の会合の出席者全員の名前が記録されている（三五年六月、および三七年二月から三八年六月まで、ただし三七年八月と三八年四月は会合なし）。これらの記録を見る限り、ほぼ参加者数は三十数名で安定している。この一六回中の出席回数別の参加者リストが表1である。なお、これ以外の回の例会についても参加者や講演者の名前が新聞での報道などでわかるものも多いが、そうしたデータは有名人が記録されやすいバイアスがかかっていると考えられるので、本当のところ誰が中心になつていたのかを判断する上では好ましくないと考え、今回は参考としなかった。また、『一覧』に記録されている三五年六月の会合は正式発足前の会合でもあり、時期もはずれていて、出席者層にも明らかな違いがある。そこで、この回

の出席者はアステリスクで示した。出席回数一回でアステリスクがついている者は、三七〇三八年においては一度も出席していないことを意味する。

さて、これらの会合に一定の回数以上出席している者は記録されている当時の防止会の中心的メンバーといつてさしつかえないであろう。もちろん逆は必ずしも真ではない。たとえば好本督は三七年〇三八年には留学中であつたために会合に参加できなかったが、情報提供など積極的関与をしている。また、データが三七年と三八年にかたよつていることから、それ以前や以後に積極的に参加していた者はデータから抜け落ちてしまうことになる。また、一般に、曜日にかかわらず一五日の午後で開催されるという例会に毎回参加するのは職を持つ者には難しかったであろう。以上のような難点はあるつつも、例会の出席者全員のリストというのは貴重なデータである。また、三七年から三八年というものは、設立当初の熱狂が一段落した時期であり、長期的なコミットメントをもつて参加している参加者が多いことが期待される。

一つの目安として一〇回以上の参加者をリストアップすると、入江濤吉、加藤熊一郎（咄堂）、來馬琢道、桜井義肇、桜井彦一郎（鷗村）、杉村広太郎（楚人冠）、高島円（米峰）、広井辰太郎、本田増次郎、山県悌三郎、山県五十雄、山県文夫、吉田賢龍の一二人がいる。九回までふくめると、片山寛、斯波貞吉、手島益雄、根本正、林吾一の五人も入ってくる。なお、明治三七年から三八年の段階で幹事として名を連ねているのは桜井義肇、高島米峰、広井辰太郎、本田

増次郎、山県悌三郎の五人（『あはれみ』第四号および第七号）であり、五人とも一〇回以上の出席である。

呼びかけ人たちの中では大内、島地、前田、梅原らもかなり頻繁に顔をだしている（それぞれ五回、七回、六回、七回）が、高楠と巖本は三七年から三八年にかけては一度も出席していない。この意味では、広井と桜井以外の呼びかけ人たちは、完全に手をひいたわけではないにせよ、運動の中心的担い手からははずれてきていることが分かる。

さて、これら頻繁な出席者はどういう人たちだったのでろうか。すでに紹介した桜井義肇と広井を除いてみて行こう。まず目立つのは仏教者とキリスト者である。來馬琢道は曹洞宗の僧侶で雑誌『仏教』の主幹をつとめた人物であり、加藤咄堂と高島米峰は僧侶というわけではないが仏教関係の著作を多く残している。本田増次郎、根本正の二人はキリスト者であり、杉村楚人冠はユニテリアン学校の卒業生だった。

次に目立つのは報道・出版関係者である。桜井鷗村は『女学雑誌』『英文新誌』などの編集をし、報知新聞にも在籍していた。杉村楚人冠は朝日新聞の記者、山県悌三郎は以前に『少年園』という最初の少年雑誌を編集していた人物であり内外出版協会の創設者、その弟の山県五十雄と斯波貞吉は『萬朝報』の記者である。

その他、教育関係者としては、当時東京府女子師範学校校長の林吾一、当時女子英学塾（後の津田塾）の幹事であった桜井鷗村、当時東京高等師範学校教授だった本田増次郎、のちに広島高校校長

となる吉田賢龍などがあてはまるであろう¹⁵⁾。社会運動家としては斯波貞吉（明治三八年に国家社会党を結党）と根本正（禁酒禁煙運動のくさわげ）の名前が目立つ。その他の者についても簡単にまとめる。山県文夫は山県悌三郎の子で少年動物愛護会の設立にもかかわった。片山寛は本田増次郎と山県悌三郎の友人で『英語発音字』（二九〇七）などの著書がある（以上二人については山県一九八七を参照）。入江濤吉は伝記的情報は不明だが『あはれみ』への投稿から獣医であることがわかる。手島益雄もおなじく伝記的情報は不明だが、『動物百話』（一九三〇）などの著書がある。

このように書くと、確かに今川が言うようにさまざまな背景を持つ人々があつまっている。しかし、さらに詳細にみていくと、ばらばらな人々があつまっているわけではなく、血縁や運動でむすばれたいくつかのグループをなしていることも見えてくる。

核となる一つのグループは、山県悌三郎とその周辺の人物である。幹事の一人本田増次郎は山県の友人で、山県の当時山県邸に居候して『あはれみ』の編集にあたっていたという（山県一九八七、二四七ページ、『あはれみ』七号四ページ）。山県自身も幹事で、自らの家を事務所として提供し、自らの出版社である内外出版協会から動物虐待防止会叢書を出版していた。ちなみに山県は後に受洗してキリスト者となるが、この時点では特にキリスト教と関係が深いわけではなかった。五十雄と文夫は山県の身内であり、片山も山県の友人である。事務、機関誌発行、啓蒙活動と、会の基本的な実務がすべて彼らによってまかなわれていたわけで、初期の

動物虐待防止会を実務的な面で支えたのがこのグループ（以下山県グループと呼ぶ）であることはまちがいない。

山県五十雄と萬朝報社で同僚だった斯波もこのグループに入れてもよさそうに見えるが、事情はもう少し複雑である。萬朝報については社主の黒岩周六（涙香）も防止会に積極的に参加しているし、内村鑑三や堺利彦ら他の社員も防止会に関わっている。さらに言えば、黒岩、山県五十雄、斯波の三人は防止会の前年に結成された「理想団」の発起人もあった。理想団とは萬朝報の社員が中心となって結成された社会改良団体であり、数千人の会員を擁したが、この理想団に山県悌三郎も評議員として加わっている（有山一九七九）。つまり、山県グループとかなり密接な関係にある理想団グループが防止会に参加していたと解釈した方が実情にそっくりである。

もう一つ目につくのが、明治三三年に結成された仏教清徒同志会（明治三六年に新仏教徒同志会と改称、以下「同志会」と略）の関係者と、その周囲の人々である。防止会幹事だった高嶋米峰と杉村楚人冠は仏教清徒同志会の創設メンバーで加藤咄堂もあとから同志会に加わり、同志会のもう一人の中心人物である境野黄洋も防止会の会合に八回出席している。吉田（一九六四、五七一ページ）によれば明治四四年には同志会の評議員全員が動物愛護会の会員になったとのことであり、同志会が動物愛護運動にかなりのコミットメントを持っていたことはまちがいない。

同志会の行っていた運動は「新仏教運動」とよばれ、迷信や儀式を排した合理的な信仰と他宗教への寛容を綱領としていた（菅沼

二〇〇〇b、林二〇〇〇）。すぐに気づかれるように新仏教運動のこうした特徴はキリスト教におけるユニテリアン派と非常に近い。実際、ユニテリアン協会と同志会は密接な協力関係にあり、『中央公論』明治三四年五月号の「宗教評論」では両者の協力を「明治宗教史で特筆すべき出来事」としている（菅沼二〇〇〇b、八ページ、土屋二〇〇五、一三四ページ）。特に当時のユニテリアン協会のリーダーの一人佐治実然はもと僧侶でもあり、土屋博政によって「仏教的ユニテリアン」と形容されているほど仏教に近い立場をとっていた（土屋一九九八）。ユニテリアンの教育をうけた杉村が同志会の創設メンバーであることも両者の協力関係を象徴する。

ここで興味深いのが広井の動きである。彼は、防止会結成当時からユニテリアンだったわけではなく、防止会が発足したあとの明治三七年にユニテリアンに改宗した（土屋一九九八、一一ページ）。その後のユニテリアン協会の内紛では佐治に近い立場をとって協会を去っている。また、明治三五年以降、同志会の機関誌『新仏教』に何度も寄稿するようになり、同志会とも密接な関係を持つようになっている（広井の動物愛護論の集大成ともいべき『非万物霊長論』も『新仏教』第四巻一〇〇〜一二号に連載されたものである）。うがった見方をすれば、『太陽』や『中央公論』に論考を掲載したころや発起人を募っていた時期には孤立していた広井が「同志」を求めてユニテリアン派や同志会に近づいたのではないか、とも思われる。動機はどうあれ、三七年ごろには広井が高嶋らと非常に近い立場にあったことは確かであろう。このユニテリアンと同志会の中

心メンバーのグループを「ユニテリアンⅡ新仏教グループ」と呼ぶことにしよう。

また、新仏教運動の中心となった高嶋と境野が哲学館（後の東洋大学）の出身者であることから、自由な精神を重んじる哲学館の教育理念と新仏教運動の関係を指摘する研究もある（菅沼二〇〇〇a）。そうした目でみると、実は哲学館ないし東洋大学の関係者も呼びかけ人や発足当初の中心メンバーに多い。大内、島地、前田は講師ないし臨時講師として防止会結成以前に哲学館で教えており、防止会結成以後には高楠、広井、加藤が哲学館ないし東洋大学で教鞭をとっている（東洋大学一九九六）。ただし、哲学館館主の井上円了は、発起人には名をつらねているものの、その後の会合にはほとんど出席していない¹⁶。

以上のような人間関係をふまえるなら、ユニテリアンⅡ新仏教グループが核となり、哲学館関係者がそれを取りまくゆるやかな連合体が、防止会の運動を一方でささえていたと考えることはできそうである。

以上のような考察からすると、創設当時の防止会の運動には人脈上少なくとも二つの核となる小グループがあり、その周辺に動物愛護の理念に賛同する人々が集まっていた、という状況が見えてくる。防止会（改称して動物愛護会となる）の長期的な活動という観点から言うなら、山県グループよりもユニテリアンⅡ新仏教グループの方が影響は大きい。まず、山県グループの方について見ると、『あはれみ』の編集担当だった本田が明治三八年に渡米すると『あはれ

み』の刊行も停止し（『あはれみ』第九号七ページ）、また、明治四四年には山県文夫が死んで内外出版協会もほどなく倒産した（山県一九八七、一五七―一五八ページ）。大正期以降の動物愛護会活動には山県や本田の名前は登場しない。これに対し、ユニテリアン¹¹新仏教グループは広井と高嶋の二人がその後長く愛護会の中心メンバーとなつてことあるごとに新聞の論説や演説会に顔を出しているし、杉村が主幹となつて『アサヒグラフ』が創刊された大正二二年には、上野動物園の象を解放しようという大々的なキャンペーンを『アサヒグラフ』誌上で行うことになる¹²。

もちろん、防止会を支えていたのがこれらのグループだけだったと考える必要はない。実際、「中心的メンバー」の基準をもう少しゆるくとれば、どちらのグループにも属さない人々の比率が高くなる（本稿で詳しく論じる余裕はないが）。また、ここで利用したような伝記的事実だけからは見えてこないような人間関係が存在していた可能性は十分ある。しかし、そうした可能性は、ここで挙げたような二つのグループが存在していたことを否定するものではない。本稿ではそれ以上のことを主張してはいない。

さらに、この二つのグループが対立していたとか、防止会内部分派として機能したと考える必要はない。すでに名前のあがった佐治や安部磯雄はユニテリアン協会のリーダーであるとともに理想団の評議員でもあった（もつとも佐治や安倍は防止会の発起人・評議員に名を連ねるものの防止会の会合にほとんど顔を出しておらず、まさに「名前を貸しているだけ」という状態だったようである）。こ

のあたりの人脈はいろいろなところでつながっている。ただ、人脈としてつながっているいいないは別として、会に参加し主体的に活動する上での動機は、やはりそれぞれの人のバックグラウンドに影響されるであろう。本節で試みたのは、名簿の分析からそのバックグラウンドの部分にもう少し深く切り込むことである。

五 動物虐待防止会を支えていた要因の再検討

さて、このように呼びかけ人や例会参加者の背景を分析した結果、第一節で紹介した先行研究で示されていた認識について、何か改めて言うことはあるだろうか。ただし、本稿での分析の性格上、特に、冒頭で区別した開始の要因や持続の要因についての主張として彼らの分析を解した場合に何が言えるかを考えることになる。

まず、動物愛護運動をキリスト者と仏教者の運動という観点からとらえる吉田の分析はどうだろうか。本稿で見たような中心的メンバーを念頭におくかぎり、吉田の分析は意外にいいところを突いているということが言えそうである。しかし、一般的なキリスト者と一般的な仏教者が中心となつていると考えると、もしかしたら運動の性格を見誤るかもしれない。キリスト教系、仏教系をとわず、超宗派的な合理的信仰を標榜する人々が運動の中心にいたということに念頭においておいた方がいいであろう。また、呼びかけ人のグループ（大内や桜井の仏教系大衆運動）と実際に運営していた同志会のグループの間で、短期間のうちに微妙な世代交代がすすんだことも、

「仏教者」というような形でひとくくりにすると思えなくなってしまう。もう一つ、山県グループのような宗教性の薄いグループが運動の中心にいたことが見えにくくなることも問題であろう。

次に、広井という個人の役割を強調する尾崎たちの分析はどうだろうか。『女学雑誌』におけるキャンペーンやおそらくその仕掛人であった巖本の存在を念頭におくなら、話はそう単純ではなかったといわざるを得ないだろう。それなりの影響力と行動力を備えた人々が呼びかけに答えたからこそ、日本における動物愛護運動は動き出すことができたのである。仮に運動の起点を一人の個人に求めるとしても、それにふさわしいのは広井よりも大内ではないかと思われる。もちろん、これは動物愛護運動の理論的支柱としての広井の役割を否定するものではない。

第三に、知識人による啓蒙運動として動物愛護運動をとらえる今川の分析はどうだろうか。実のところ、黒岩涙香らの理想団はまさに知識人による啓蒙を目的としており、理想団の評議員が何人も加わっていた動物愛護運動もまたそれと似た性格を持つことは確かには否定できないだろう。ただ、特にユニテリアン¹⁸新仏教グループにとって宗教的な大衆運動としての動機があったことを見落とすなら、運動を支えた動機づけの重要な部分が欠落する可能性がある。つまり、全体像を捉えるという意味では、吉田と今川は逆の方向で偏っており、両方を視野に入れることでバランスのとれた見方ができる可能性がある。

最後に、「他者の苦痛への配慮」の制度化の結果という近森の分

析はどうだろうか。実のところ、そうしたマクロな要因については考えるには、本稿で行ったようなバックグラウンドの検討だけでは不十分で、言説分析から彼らを支配していた思考法を洗い出す必要があるだろう¹⁹。しかし、動物愛護運動が他者の苦痛に関する他の社会問題を避けつつ苦痛への感受性を示すために上・中流階級にとって好都合な運動だった、という近森の分析についてはこの背景分析からも疑問を付すことができる。大内にせよ桜井にせよ、理想団にせよ同志会にせよ、多種多様な社会問題に取り組んでおり、動物愛護運動はそのうちの一つである。そうした人々にとって免罪符としての動物愛護運動が必要だったとは考えにくい。例外的に、広井は生涯にわたって動物愛護運動を中心に活動していたが、彼の場合は出自は非常に貧しかったと本人が振り返っており（広井一九〇九）、また動物愛護運動をはじめたころはまだ無職であったことから「上・中流階級」とは呼びにくい。少なくとも運動の中心にいた人々には近森の言うような動機は働きにくかったとみなすべきであろう。

こうした点もまた彼らの実際の言説をふまえて検証するべきであるが、その作業は稿を改めて行うこととする。また、近森の分析は、冒頭の区別に即していえば運動の広がりの要因としてこうしたものを挙げていると考えられるので、その意味では今述べたような視点が欠けていることは近森の分析の欠点とはならないだろう。

以上、参加者の背景分析という手法を用いて明治期の動物愛護運動

をささえた要因について考察してきた。この手法をとることによって、他の手法では見えてきにくい、ミクロなレベルでの動機づけについて一端を明らかにできたのではないかと考える。

注

- (1) 近森は「宗教学者」という表現をしている(近森二〇〇〇、八四―八五ページ)が、広井が教育を受けたのはドイツ新教神学校であり、少なくともアカデミックな宗教学者ではなかったと考えた方がよいだろう。のちに東洋大学に就職したときには宗教学の授業を明治三六年と三七年二年にわたって行っているが、その後は退職までずっと英語を担当していたようである(東洋大学一九九六、一一―ページ)。
- (2) 奥付は明治三六年六月三日となっており、同月一五日の会合でこの名前の冊子が配布されたことが『萬朝報』M 36・6・17(二面)で報じられている。
- (3) 目立つ違いとして、広井が当時の日誌を見ながら書いた回想とは一回目の会合の日付と出席者に異動がある。広井によれば、一回目の準備会は明治三五年の二月二日であり、痴山義亮、干川貫一が加わっているかわりに高楠の名前がない(広井一九四〇a)。これは、『一覽』で述べられた会合のあとであらためて相談会としての一回目が二月二日にもたれたと考えれば説明できそうだが、『一覽』ではそのあとの二月九日をも一回目の相談会としている。どちらを採用するかで以下の分析の細部を考え直す必要があるが、大勢には影響はないだろう。
- (4) 待山一九〇二、『児童研究』の明治三五年六月号(第五卷第四号二五―二七ページ)で公開された趣意書には六三名の発起人が名を挙げられている。広井の回想では最終的に七四人が名を連ねたということだが(広井一九四〇b)、今のところ七四人の名簿は確認できていない。
- (5) 六月の会合については『読売新聞』明治三五年六月一七日期刊五面、『時事新報』明治三五年六月一七日、『萬朝報』明治三五年六月一七日二面などで、一〇月の会合については『読売新聞』明治三五年一〇月二六

日刊一面『萬朝報』明治三五年一〇月二五日二面および二六日二面などで報じられている。

- (6) 婦人部の結成については『萬朝報』明治三六年六月二〇日『朝日新聞』明治三六年六月二〇日などに予告があり、『をんな』第三巻第七号な一五ページや『婦女新聞』一六四号(六月二九日号)二面で会の模様が伝えられている。ただし、婦人部については同年の七月に第二回の会合が開かれた後(上記『をんな』参照)、活動の情報がない。少年動物愛護会については『児童研究』第九卷第四号四七―四八ページ、『萬朝報』明治三九年三月二日二面などに結成大会の情報があるほか、大正期に入っても岸辺福雄を中心として活動していたことが新聞報道などから確認できる(『読売新聞』大正七年五月二六日、『アサヒグラフ』一六五号(大正一二年七月八日)五面、『アサヒグラフ』一七八号(大正一二年七月二日)三面)。
- (7) 千葉支部については『萬朝報』明治三六年七月一七日二面、横浜動物虐待防止会については『The Japan Weekly Mail』第四五卷二二号(May 26th, 1906号)五五一ページ、神戸動物虐待防止会については無署名一九〇九を参照。
- (8) 動物虐待防止会一九〇三、二五ページおよび『あはれみ』第一号八ページにそれぞれの時期の会員数の記述がある。ただし、尾崎ほかでは明治三七年当時の会員数を一八二人としている(この数字の根拠については記されていない)。
- (9) 以下、本節と次節の記述においては以下のような各種人名辞典を参考とした。明治人名辞典、大正人名辞典、昭和人名辞典、明治過去帳(物故人名辞典)、小学館スーパードictionary、コンサイス日本人名辞典、新潮日本人名辞典、日本キリスト教歴史大辞典、日本仏教人名辞典(法蔵館版)、日本児童文学大事典。複数の辞典に採録されている者も多く、煩雑になるので個々に注を入れることはしない。
- (10) 『女学雑誌』のキャンペーンの論説の内容は三二年の広井の一連の論文と大差なかったが、なぜかこの時には動物虐待防止会設立にはいたらなかった。その理由は雑誌の性格や時代状況などいろいろ考えられる

が、それは今後の検討課題として、ここではそうした課題があることを指摘するにとどめる。

- (11) 広井自身の回想では、『太陽』での記事を読んだ大内青巒が『中央公論』に口利きをして『中央公論』への掲載が実現したということになっている。また、『太陽』への掲載については知人の姉崎正治が当時の『太陽』の文芸欄主筆高山樗牛に紹介してくれたと回想している(広井ほか一九四二、五四―五五ページ)。
- (12) 日本ユニテリアン協会の歴史とそこにおいて広井辰太郎の果たした役割については土屋博政氏の研究が詳しい(土屋一九九八、二〇〇五)。
- (13) ちなみに目安として他の顔ぶれの年齢をまとめると、島地六四歳、大内五七歳、前田四五歳、巖本三九歳、梅原三八歳、高橋三六歳、桜井三四歳で、広井が最年少であった。
- (14) 広井の場合は社会的影響力の問題であろうが、巖本の場合に何が障害になっていたかはすでに述べたように今後研究する必要がある課題である。
- (15) ただし、大正人名辞典(Ⅲ、下巻一〇ページ)の記述から判断すると、このころは吉田はまだ東京大学の大学院に在籍しているか、あるいは千葉中学の校長となっているころだと思われる。
- (16) ただし、明治三十六年の九月の防止会の会合で井上円了も講演を行ったようである。『読売新聞』明治三六年九月一七日朝刊一面、『萬朝報』明治三六年九月一五日二面、九月一七日二面などを参照。
- (17) 上野動物園の象は凶暴だということで長らく短い鎖で足をつながれて生活しており、この象の解放については明治期の『あはれみ』誌上でも取り上げられていた(『あはれみ』第七号五ページ)が実現しなかった。大正一二年のキャンペーンでは象を解放できる頑丈な檻を作るということで当局との合意まではたどりつたものの、直後に関東大震災がおこって立ち消えになってしまった。『アサヒグラフ』の同年七月から八月にかけての関連記事を参照。
- (18) また別稿で論じる必要があることであるが、動物の苦痛への配慮というよりは、動物を虐待しないことで文明国としてあつかってもらいたい

文献

という、欧米への配慮、より具体的には在留外国人の視線への配慮が運動の動機として実は大きかったのではないかと思われる。

有山輝雄(一九七九)「理想団の研究〔I〕」『桃山学院大学社会学論集』一三巻一号、三七―六四ページ。

今川勲(一九九六)『犬の現代史』現代書館

尾崎敬承、榎敬蔵、加藤由子(一九八二)「動物愛護を唱えた人々」『愛玩動物』三三号、一〇―一八ページ

菅沼晃(二〇〇〇a)「国粹主義の思潮と哲学館」池田英俊ほか編『国家と仏教―自由な信仰を求めて』(現代日本と仏教Ⅱ)平凡社、一六三―一七八ページ。

菅沼晃(二〇〇〇b)「新仏教運動と哲学館——境野黄洋と高嶋米峰を中心に——」『印度学仏教学研究』四九巻二号(通巻九七号)一一―一ページ。

待山(一九〇二「明治三五」)「動物虐待防止会の成立」『中央公論』明治三五年五月号、五九―六一ページ

ターナー、ジェイムズ(一九九四)『動物への配慮』齋藤九一訳、法政大学出版社

近森高明(二〇〇〇)「動物愛護の(起源)——明治三〇年代における苦痛への配慮と動物愛護運動——」『京都社会学年報』第八号、八一―九六ページ

土屋博政(一九九八)「日本ユニテリアン協会の紛糾に関する一考察」『慶応義塾大学日吉紀要 英語英米文学』no.33、一―四九ページ。

土屋博政(二〇〇五)「日本のユニテリアンの盛衰の歴史を語る」『慶応義塾大学日吉紀要。英語英米文学』no.47、一―三二―一八五ページ。

動物虐待防止会(一九〇三)『動物虐待防止会一覽』(筆者蔵)

東洋大学井上円了記念学術センター(一九九六)『東洋大学人名録 役員・教職員 戦前編』東洋大学井上円了記念学術センター

林淳(二〇〇〇)『新仏教徒同志会の運動』池田英俊ほか編『国家と仏教
——自由な信仰を求めて』(現代日本と仏教Ⅱ)平凡社、一八〇—
一八五ページ。

『アサヒグラフ』
『萬朝報』

広井辰太郎(一八九九a)『明治三二』誰か牛馬の為に涙を濺ぐものぞ』太
陽』第五卷一七号一七四—一七六ページ

広井辰太郎(一八九九b)『明治三二』誰か牛馬の為に涙を濺ぐものぞ(承
前)』太陽』第五卷一八号一七一—一七五ページ

広井辰太郎(一八九九c)『明治三二』動物保護論』中央公論』明治三二
年一月号七一—四ページ

広井辰太郎(一九〇九)『明治四二』大枚五円が学業の資本』新公論』第
二四年二号一六二—一六四ページ

広井辰太郎(一九四〇a)『昭和一五』動物愛護運動の回顧(十三)』動物
愛護』第一三号五—五六ページ

広井辰太郎(一九四〇b)『昭和一五』動物愛護運動の回顧(十七)』動物
愛護』第一七号七一—七二ページ

広井辰太郎(一九四一)『昭和一六』動物愛護運動の回顧(二十二)』動物
愛護』第二三号九六—一〇〇ページ

広井辰太郎ほか(一九四二)『昭和一七年』動物愛護運動を語る(座談会)
『動物文学』八七(一九四二)号五—一六五ページ。

山県悌三郎(一九八七)『一九三四』児孫の為に余の生涯を語る』弘隆社
無署名(一九〇九)『明治四二』春興漫筆』六条学報』九一号 五八—
五九ページ

吉田久一(一九六四)『日本近代仏教社会史研究』吉川弘文堂(動物虐待
防止運動)五七〇—五七二ページ)

新聞・機関誌等

- 『あはれみ』(動物虐待防止会機関誌、国立国会図書館蔵)
- 『動物愛護』(動物愛護会機関誌、成田山仏教図書館蔵)
- 『読売新聞』
- 『東京朝日新聞』